

1. 栄養的にみて野菜の重要性はいうまでもないが、近年その価格の上昇と変動が著るしい。この原因を究明するには消費の観点および生産の観点があるだろうが、本稿においては消費の観点から接近し、国民栄養に関する含意を考察する。

2. 昭和30～37年総理府「家計調査年報」を利用し、大都市代表として東京都、上述の高価格水準、高変動率の顕著な都市として札幌市、更に全国平均的な傾向をみるために全国都市平均について基本的な消費分析を行ない比較検討する。具体的な方法としては「多変量統計解析」を用いた。

3. 札幌市および東京都における野菜消費の価格弾力性・所得弾力性をみるにその間に有意差は認められない。しかしながら対前年比基準で同様の解析を行なう場合に、札幌市において所得効果が著るしく大きく現われる。更に札幌市について、単価を基準に主要野菜を高級野菜と大衆野菜に分けて同様の解析を試みるに、高級野菜は相対的に硬直的である。一方大衆野菜は価格が上昇する場合には高級野菜以上に硬直的であるが、下降する場合には非常に弾力的である。以上を要約するに、大衆野菜にみられる非整合性は基準量を計る低消費水準に密接に関係し、高級野菜にみられる硬直性はデモンストレーション効果と表裏をなすと考えられる。札幌市以外においても以上の2点は消費者教育上見逃せない点であろう。